

新潮文庫

ゲーテ格言集

高橋健二編訳



新潮社

かくげんしゅう
ゲーテ格言集



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫黄4B

昭和二十七年六月二十五日 発行
昭和四十九年八月三十日 四十四刷

訳者 高橋健二

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六五一
編集部(〇三)二六六五四二
振替 東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

ゲーテ格言集

高橋健二訳編



目次

序に代えて……………	七
愛と女性について……………	八
人間と人間性について……………	二〇
科学、自然、二元性について……………	四
神、信仰、運命について……………	六
行動について……………	七
芸術と文学について……………	五
幸福について……………	二六
自我と自由と節度について……………	三三

個人と社会について	一三七
人生について	一五〇
経験の教え	一六三
人生の憂うつ	一七一
身辺雑感	一七六
生活の知恵	一八五
ゲーテの主要な著作	一九五
手紙、談話等のあてられた人物	二〇一
あとがき	二〇三

ゲ
ー
テ
格
言
集

序に代えて

太陽が照れば塵も輝く。

〔格言と反省〕から

*

考える人間の最も美しい幸福は、究め得るものを究めてしまい、究め得ないものを静かに崇めることである。

〔格言と反省〕から

*

人間のあやまちこそ人間をほんとうに愛すべきものにする。

〔格言と反省〕から

*

戦いの間に得たものでなければ、花冠に値するものは、絶えてない。

（一七八〇年三月三十一日の日記）

*

真理に対する愛は、到る処に善いものを見いだし、これを貴ぶことを知るといふ点に現われる。

〔格言と反省〕から

愛と女性について

*

いつも変わらなくてこそ、ほんとの愛だ。
一切を与えられても、一切を拒まれても、変わらなくてこそ。

〔四季〕夏の部から

*

お前の努力は愛の中にあれ、
お前の生活はおこないであれ。

〔旅の歌〕から。遍歴時代第三卷第一章、一八二二年

*

愛人の欠点を美德と思わないほどの者は、愛しているとは言えない。

〔格言と反省〕から

*

いつも同じ花ばかりなので、花よりほかの何かをお送りすることができたら、と思いま

す。しかし、それは愛についてと同じことで、愛もまた単調なものです。

（シュタイン夫人へ、一七七九年五月二三日）

*

われ／＼はどこから生まれて来たか。

愛から。

われ／＼はいかにして滅ぶか。

愛なきため。

われ／＼は何によって自己に打ち克つか。

愛によって。

われ／＼も愛を見出し得るか。

愛によって。

長い間泣かずに済むのは何によるか。

愛による。

われ／＼をたえず結びつけるのは何か。

愛である。

（シュタイン夫人へ、一七八六年六月二八日）

ひとりの人を愛する心は、どんな人をも憎むことができませぬ。

〔「恋人のむら気」第五景、一七六八年〕

空気と光と

そして友だちの愛

これだけ残っていたら、

弱りきってしまうな。

（一七七六年一月作詩）

自発的に頼るといふのはこの上なく美しい状態である。そしてそれは愛なくして、どうして可能であろう！

〔「親和力」第二部第五章から〕

愛のないものだけが欠点を認める。従って、欠点を看取するためには、愛をなくさねば

ならない。しかし、必要以上に愛をなくすべきでない。

〔「格言と反省」から〕

*

生き且つ愛さなければならぬ。命も愛も終わりがあ
る。運命の女神よ、この両者の糸を同時に切ってください。

〔「四季」夏の部から〕

*

どんなことが真理とか寓話とか言って、
数千巻の本に現われて来ようと、
愛がくさびの役をしなかつたら、
それは皆バベルの塔に過ぎない。

〔「温順なクセーニエン」第三集から〕

*

性急にやらねばならぬこともたくさんありますが、

節度を保ち、不自由を忍ばねば、手に入れることのできぬものもあります。
徳はそれだと申します。

徳とは縁続きの愛も同様です。

〔「タッソー」一一一九行以下〕

人は愛するところのものだけを知る。知識がより深くなり、完全にならなければならぬほど、愛、いな情熱は一層強く、強力に、生きくとならなければならぬ。

(ヤコービに、一八二二年五月一〇日)

*

*

女の流す涙が多かろうが、少なかろうが、それで海の水かさが増すわけではありません。でも、幾千人の女のなかでひとりでも救われるというのは悪くはありません。幾千人の男のなかに実のある人がひとりでもいるというのは、まんざらでもありません。

(「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」第四卷第二〇章から)

*

婦人を最も力づくよく保護することを心得ている男だけが

婦人の好意を受ける資格がある。

(「ファウスト」第二部九四四—五五行)

*

女が男のこの上なく美しい

半身として与えられもしたように、

夜はこの世のなかば、それも

この上なく美しいなかばなのに。

〔「フィリーネ」という詩、一七九五年作、から〕

*

女というものはその本分通り早くから仕えることを習うがよいのです。

仕えることによつて始めてやがて治めることが、

また家の中で分相應の力を持つことが、できるようになるのです。

女兄弟は早くから男兄弟に仕え、両親に仕えます。

女の一生というものは、年中絶え間なく行つたり来たり、

あげたり運んだり 他の人のために支度したり間に合わしたりするものです。

〔「ヘルマンとドロテア」第七の歌から〕

*

ふたりのしもべを使っている主人は、

よく世話をしてもらえない。

家に女がふたりいたら、

きれいに掃除ができないだろう。

（西東詩編「ことわざの書」から）

*

女を遇するには寛大になせ！

女は曲がれる肋骨もて作られたり。

神もそれを真直ぐにはなし得ざりき。

それを曲げんとすれば折れ、

捨ておけば、なお曲がる。

汝、よきアダムよ、より悪しきことありや？

女を遇するには寛大になせ！

肋骨の折るるは、好ましからず。

（西東詩編「観察の書」から）

*

人の一生のうちには、人の心を

喜びや悲しみでゆるがすような

大事な瞬間が幾度かあるものです。

そういう場合、男なら自分の身なりなど忘れて、

むぞうさに多せいの前に出ますが、

女はそういう時でもやはり皆に気に入ろうと、

えりぬきの衣裳や申しぶんない飾りを身につけて、

人前に出てうらやまれようとするものです。

（悲劇「私生の娘」一八〇三年作）
第一幕第六場から

*

男子は、婦人の占め得る最高の地位に婦人をおこうとしています。家庭の支配ということより高い地位がありますか。男は外的の事情に悩まされ、財産を作り、これを守らねばなりません。その上、国務に関与したり、到る処で周囲の事情に左右されます。私に言わせれば、男は支配しているつもりで何も支配せず、理性的であろうと欲して、常にひたすら政略的にならざるを得ず、公明であろうとして、隠し立てをし、正直であろうとして、うそをつかさざるを得ないのです。達しられない目的のために、自己との調和という最も美しい目的を常に放棄しなければならぬのです。これに反し、分別のある主婦は内部において実際に支配し、家族全体にあらゆる活動と満足とを可能にします。われ／＼が正しく善いと考えることを実行し、目的に達する手段を実際に支配する以外に、人間の最高の幸福がありますか。そしてわれ／＼の最も手近な目的は、家庭の内部をお